

## 麗澤での日々を振りかえって

伊東俊太郎  
服部 英二

### 麗澤とのご縁

服部…私はこの研究所には十五、六歳の時からご縁がありました。父の関係で高校の時に強制的に廣池学園に転校させられたんです。ですから道徳科学研究センター（以下、道科研）に来ることになっても最初から内部の人間のような気持ちがありました。廣池家との非常に深いご縁も恩もありますし、ここにいらっしゃる皆さんもそういう方が多いと思います。ところが伊東先生は外部からパッと来られたわけですね。伊東先生の五大革命論などがぴったり廣池千九郎にも合致するということで、大

澤俊夫先生から声をかけて伊東先生に来ていただいたという経緯ですから、モラロジ―ということを最初はご存じなかったところを、このモラロジ―っていうのは比較文明学だとパッと見抜かれて麗澤大学と道科研に来ていただいたということになりますね。

伊東…私はもともと東京大学にいて、その後、京都の国際日本文化研究センター（日文研）に移ったんですけど、その時に廣池幹堂理事長と大澤俊夫先生が、日文研の梅原猛所長のところに来られて、「伊東を麗澤大学にください」と交渉された。僕は日文研には五年いたんですけど、三年ぐ

らい経った頃に来られて、梅原さんを説得したらいいんですよ。本当に大澤さんも廣池理事長さんも熱心に仰ってくださいって、梅原先生も「まあ、しょうがないでしょう」ということで、定年の一年前に日文研を辞めたんです。麗澤大学の比較文明研究センター（比文研）ができたのは一九九四年だから、六十五歳が定年だったんですけど、僕は六十四歳の時にこちらに移ったんです。というのもセンターが出来ちゃっているんだから所長がいなきゃ困るとやや強引に。それで移って麗澤大学比較文明研究センター長になりました。その時は所長と云われていました。いろんな人に助けられ

て比較文明研究の中心機関にしようということに移ったんですね。

千九郎先生の東洋法制史その他の研究が立派な比較文明研究だという風に考えておりましたから、繋がりはあるだろうと考えましたし、それから孔子、ブッダ、イエス、ソクラテス、この四人の比較研究ということ、は僕がずっと課題にしていたものでした。東大にいた頃からやっていたんですよ。随分古い話ですが、僕は東大では教養学科というところで科学史を教えていて、東大のシニアコース（三・四年次）に科学史課程もあったんだけど、そのほかに共通科目、基礎科目というのがあって、そこで比較思想、つまり「精神革命」の問題をやっていた。今考えてみると、対象が大きいのに準備が不十分だったと思います。だからもつと本格的にやりたいなと考えていたら、それが麗澤大学でやっていた。麗澤大学はまさにその四人の比較研究をするということなので、これは一番いいということで、それを比文研の研究の中心にしようよと。

服部：私は伊東先生の『文明の誕生』を読みました、これは本当に名著ですよ。私は

本当に感銘を受けたんですけど、先生の言われる「精神革命」の時代、これはヤスパースの「枢軸の時代」とほぼ対応するのですが、そこで挙げている聖人の研究を廣池千九郎もやっていたということですから、ここはヤスパースと伊東先生と廣池千九郎を合体するところになる。私もその点には非常に惹かれました。実は私は九四年の途中にユネスコを定年退官して帰国してきたのですよ。それで前々から言われていたんですよけど、この麗澤大学の方へ来てくれと。ただ、すぐには入れませんから最初は三年くらい客員教授でした。伊東先生から比文研に入ってくれと言われて、それから参加するようになったわけです。

比較研究っていうのが一番惹かれたところなんです。というのは、国際公務員としてユネスコに勤めていた時に、こういう事を考えたのですね。私は大学は哲学科の出身なんですけど、いままでの哲学書を読んでも各哲学者の生きた社会的条件とか彼が生きた文明環境、彼が生きた風土というのが哲学書に書かれていない、理論だけが書いてある。ところがユネスコに勤めていま

すとね、世界各国に出張しますよね。その間にいろんな文明の遺跡を見る。そうすると、「あ、ここにこういう人がいたんだ」と、風土と直結して思想家が浮かんでくるようになったのです。結局、一つの文明の中から一人の哲学者が生まれるのだと、それを現地で回っているうちに実感するようになったんです。ですから、哲学よりは比較文明に惹かれていて、私が帰国して最初に出した本『文明の交差路で考える』も、やはり私が現地で得た体験的な理解から出た本になった。ですから伊東先生から声をかけて下さった時に喜んで比文研に参加することになりました。

伊東：それで僕が来てすぐに、国際比較文明学会を麗澤大学でやることができました。その時、僕は国際比較文明学会の会長だったんですが、会長をやって四年目だったと思います。会長を四年で辞めたので最後の年ですよ、その国際会議をここでやってすごく大成功だった。鎌倉なんかも行って、廣池理事長が本当によく協力してくださったんですよ。会員がみんな喜びましたね、それで麗澤の名前が世界的に知られ

たつたと思うんです。

それからもう一つ大きな、忘れられないことは、パキスタンですよ。イスラマバードで『人類史におけるガンダーラの意義』というシンポジウムをやった。これは向こうの政府が総掛かりで、文部大臣、科学大臣みんな出てきてね、それから考古学が盛んでしょ、各博物館長が全部出てきました。

**服部**…あれは実はこういう事なんです。ユネスコで私が発案して「シルクロード・対話の道総合調査」というものを実際に実行したんですけど、その中で実は「仏教の道」をやるということを私は立案していた。すると、どうしてもカシミール地方のガンダーラを通りますね。ところがギルギットという街がパキスタンの北の方にあるのです。するとその頃のソ連の代表がとんできて「あんたが仏教の道をやって、ギルギットを入れるなら、私の国はこのプロジェクトから撤退する」と言ってきたんですよ。僕はびつくりして、そのロシア人は友人だったものですから「何を言ってるんだ」と言ったら、問題はギルギットでし

た。このカシミール地方はパキスタンが実質領有していますけれど、インドは常にその領有権を主張している。つまり、北方領土とか尖閣諸島に似た状況で、そこにユネスコの調査隊が入ったらどうなるかというところ、どこかのビザが必要でしょ。パキスタンのビザになっちゃうのです。そうすると、国連機関であるユネスコの調査隊がパキスタンのビザで入るということになって、領有権を正当化することになるっていうことなんですね。カシミールがインド領ならインドとアフガニスタンは直結するんです。それをソ連は狙っていたから断固として反対したというわけです。このことがあったので、私たちは「仏教の道」は後回しにしようとして一旦やめたんです。その後、日本に帰ってきた時に、比文研からパキスタンのハッサン・ダニ博士と交信しました。「私はもうユネスコではなく一介の大学教授だからガンダーラの研究を自由にやりましょうよ」と。ダニ博士というのは有名な中央アジアの考古学者です。それで紛争が起こりそうな気配もあったけど、比文研でやるぞと言って本当にやったんです

ね。伊東先生がセンター長だから中心になっていただいて、日本のいろんなシルクロード学者に声をかけて、八大学ぐらいが参加しました。それでもってガンダーラをくまなく調査して、それから伊東先生はモンゴルまで、私は途中からスワット渓谷からギルギット、更にカラコルム山脈に近いフンザまで行っただけですよ。これはあまり行った人がいない。そこまで行って色んな発見があった。

**伊東**…あの辺は仏像が誕生したところで、仏像といっても彫刻ではなく、最初は岩に描かれていたんです。そういう仏像がずっと描かれているところですよ。

**服部**…スワットというインダス川の支流なんですけど、スワット川とインダス川の上流の所にバートと崖壁に岩絵が描かれている。それを私はパキスタンの学者と一緒にくまなく調査できた。本当に大きな収穫でした。今はあそこにパキスタンがダムを造るって計画があるのをご存知ですか。そうすると岩絵が水没してしまふ。写真でしっかり撮りましたので、次に出す本（『転生する文明』）でもちゃんと出しますけど、

その岩絵を研究しますとね、あそこで仏教とヘレニズムと、その頃復活してきたブラフマニズムとそれから元々あったゾロアスターと、少なくとも四つの文明があそこで混淆している。ゾロアスターの焔肩仏という、肩から光が出る形式がちゃんと描いてある。またギルギット辺りから東進した仏教がチベット仏教になる。パキスタンでやったシンポジウムは、比文研の大きな成果でした。

伊東…それでその時助けてくれたのは、保坂さん（保坂俊司）。保坂さんが一緒について行ってくれて、モヘンジョダロなんかと一緒に僕を助けてくれた。それからその当時お世話になったのは、この比文研時代ですけど、やっぱり川窪さん（川窪啓資）ですね。川窪先生が副センター長で助けてくれました。それから立木先生（立木教夫）です。立木先生は僕がここに移って来ずっと協力者ですよ。『比較文明研究』というあの立派な雑誌を立木先生が編集してくれたんですよ。これが大きかったですね。川窪、立木、保坂、この方々がおられなかったら僕は自分の責務を全うできなかつた。

つた。特に立木先生のご協力はありがたかった。これは感謝申し上げたい。僕は正式にありがとうを言っていないので、本当にありがとう。

服部…今も地球システム・倫理学会の名編集長です。「名」が付くんです。

伊東…それから僕はどうしても触れておかなければいけないのは、秘書だった渡瀬彰子さん（高木彰子）。名秘書で優秀だった。国際会議があると電話もみんな英語である人が受け付ける。どんどんかかってきますよね、外国から。そしてあの人が英語でダーっと答えて見事にやってのける。すごい才能の持ち主。とにかく有能な女性がいましたね、麗澤には。あの人がいたということとは素晴らしい。

僕は麗澤の良さというのがどこにあるのかというのと二つあるんですよ。一つは、人柄がいい。これがまず第一。みんな人柄がいい。僕はいくつか研究所を移っていますし、みんないい研究所でしたよ。外国も随分色んな所へ行った。だけどここはとくに人柄がいいね。教員、先生たち、それから事務の人たち、みんな人柄がいい。これ

は当たり前と思っちゃいけない。他の大学に行ったら歴史とするから。こんなもんじゃない。麗澤の良さは自然の良さ。自然を大切にしているね。綺麗だよ、美しい。キャンパスもいつもそれを考えている。エコロジーを口先ではなくて地で行ってるんだよ。人柄と自然とこの両方がい。これはもう申し分ないじゃないか。これが麗澤の良さですよ。だからこれをずっと維持していくことが大切。

#### 道徳科学研究センターとのご縁

伊東…麗澤大学で僕は六十四歳から七十五歳まで、十一年間教授だったんです。そして僕は平成十七（二〇〇五）年に七十五歳で名誉教授になって、それで辞めるつもりだった。「はい、さよなら、長い間どうもお世話になりました」と思っていたら、当時の道徳研のセンター長だった岩佐先生（岩佐信道）が来られて「伊東先生ちよつと待ってください」と。「モラロジー研究所に道徳科学研究センターがあります。こちで続けて客員教授をやってください」

と言われて、道科研に入ったというわけですね。僕は辞めるつもりだったから全く予期していません。もう十一年やっただけから十分だと。道科研に入ってみて、研究会でコメントすることが僕の役割だった。あとは年に一回講演をする。この講演が非常に僕のようになりましたね。それは『麥容の時代』という本になって世に出た。非常に自由な雰囲気でした。思った通りの研究を僕自身出来たし、みんな自由でした。そして若い人たちを含めてみんなの意見を吸収して、ディスカッションする。非常に雰囲気の良い研究センターだと思って、僕は大いに楽しんだ。二〇一七年まで十二年間、道科研の客員教授、後に顧問に変わったけど、これは僕の人生に予測しない楽しい晩年だった。実に楽しい晩年だった。研究会に出るのはとってもいい経験でしたよ。若い人達に接する、他の研究者の方々の話を聞く、それにコメントする。これは僕のトレーニング、僕自身の勉強にもなった。とっても良い十二年間を過ごさせてもらった。十一年と十二年足すと二十三年。二十三年間、この麗澤の地でお世話

になった。これは凄いいことですよ。東大は三十三年間だったから、東大をしのぐ程ではないけど、長いことになったね。でもこれは僕の楽しい晩年と記憶されますね。

服部…そう言ってもらえると我々も非常に嬉しいですね。私も約三十年パリにいたんです。あとは少しだと思ったら、麗澤大学客員教授、研究センター顧問にもなりまして、合計でいきますと二十三年ぐらいになっちゃいます。パリから帰ってきて二十三年。昨日帰ってきたようなつもりなのに、という感じなんです。つまりそのぐらい月日の経つのは速い。でも先生のおっしゃる通り、私は元来根っこがここにあってたということがありますが、京都にもいたけどパリに長くいたから違いますよ。やっぱりここへ帰ってきた時に故郷に帰ってきた感じがした、私は。私の親父のせいかもしれないですけど、そういうことがあって私皆さんを見てみると、まず一つ言えるのは皆ものすごく真面目で熱心に研究している。しかも、誰も人を傷つけようとする人がいない。これね、大きなことですね。

伊東…ほんとにそうです。

服部…他の大学でも、足を引っ張る人がいるんですよ。ところがこの研究センターにはないじゃない。

伊東…それは皆無ですね。ほとんどそういうのを耳にしたことがない。体験したこともない。やっぱりみんな認め合おうとしますよ。お互いに。これは非常にいい雰囲気じゃないだろうか。

服部…犬飼センター長（犬飼孝夫）の能力が抜群だと思うんです。組織能力。そして地球システム・倫理学会の事務局長としても完璧な仕事をしてられるし、そこに竹中さん（竹中信介）がそれを助けているという、この構造で、僕はこの学会を研究センターと双子のようにしていったらいいなと思っっています。この学会は少なくとも日本を越えています。日本を越えて色んな人、外国のアソシエイトメンバーも相当増えています。そういう学会と研究センターが結びついていくということがお互いのプラスになるんじゃないかなと思っっています。

## 道科研・比文研での研究

伊東・道徳科学研究センターに移ってから話をすると、それだけで僕の晩年の充実した時間をつくった。そして僕はそのめがけていた「精神革命」の研究、つまりソクラテス、ブッダ、孔子、イエス、この四つの比較研究はどうなったのかと言うと、これらはなんとか完成する。いま最後の「イスラエルにおける精神革命(Ⅱ)」はイエス・キリストを中心とする。Ⅰはユダヤ教の問題でした。このⅡのところを今年中に書いて次の『比較文明研究』に出るよう努力しますから、所期の目的を達し得たかなと思う。そして、その成果は皆さんの評価に、あるいは日本の読者の評価に待つわけだが、僕としてはそれはヤスパースのものを遙かに超えていると思う。ヤスパースは読みましたよ、この前ね。そしたら僕が思っているほどのものではなかった。僕がこの「精神革命」をやる時に二人の競争相手があった。一人は和辻哲郎です。和辻哲郎もこの四人を扱っていますが、バラバラです。時々ポリス世界のなんとかとか、

ソクラテスがちょっと出てくる。仏教については一冊の書物があるんです。『原始仏教の実践哲学』、これは一番いい。彼の博士論文だからね。とてもいい。だけど僕が仏教のことを書いたときに和辻哲郎は何か所しか引用できなかった。つまりもつともつと、中村元先生とかその他のいろんな人がいて、とってもいい研究があるんですよ。仏教についても儒教についても、とてもヤスパースなんかはかなわないですよ、日本の研究に。だって彼はみんなドイツ語訳でやっているんだから、えらい違いですよ。『大学』と『中庸』が孔子の著だとかめちやくちやのことが平気で書かれているんですよ。しょうがないんですよ、原典を読めないんだからね。ヤスパースには「包括者(das Umgreifende)」という概念があって、これで四つをまとめているのかなって思ったら、*Die grossen Philosophen* という四人を扱ったものの中に「包括者」って全然出てこない。これは僕が買い被りだった。よく僕の「精神革命」論を「ヤスパースを継いで」とか「ヤスパースに従って」とか言ってるけど、その人たちはヤスパースを讀

んでいるのか、僕の方がずっと正確だし突っ込んでいると僕は思っています。これは皆さんの判断で僕があれこれ言っちゃいけないことかもしれないけど、ヤスパースを讀んでみてそれだけの自信はもっている。和辻哲郎は浅い。『孔子』なんてのは最も浅い。それで、それらを超えるのでなければ意味がない。だから僕はそれを超えたい。翻訳されればどこでも伊東のほうがいいといわれるような本を僕は書きたいんで、それはなんとかできそうだ。だから人が勘違いしないように、最後に和辻哲郎とヤスパースのことをちょっと書いておこうかなと思う。僕は今まであまり人と比較して自分の方がどうかだと云うことはつまらない、自分のやるべきことをしっかりとやればいいんだと思ってきたけど、完成した後に、それが和辻とどこが違うか、ヤスパースとどこが違うかは、ちょっとやる必要があるかなと思って、四つを比べたうえでの自分独自の立場はやっぱ書いておく必要があるかなと思っています。

服部・僕はヤスパースよりも今期待すべきはオーギュスタン・ベルクだと思います。

伊東・オーギュスタン・ベルクの偉いのは  
 原典を読んでいる。とにかく和辻その他の  
 原典を深く読み込んでいる。それでヨーロ  
 ッパ語に直すでしょ。だから日本の発想が  
 世界化するんですよ。彼のおかげで。

服部…あの人が日本の思想を世界化してく  
 れる。そのちょうど中間にいて、この人は  
 素晴らしい。

伊東…素晴らしい。僕はオーギュスタン・  
 ベルクに呼ばれてパリの社会科学高等研究  
 院で、彼の隣に僕の部屋をくれてね。それ  
 で一緒にずっとやってきたから、ベルクの  
 こと本当によく知っている。それから僕の  
 講義に毎回出てきてくれました。ベルク以  
 外のフランスの教授たちも出てきてくれ  
 た。だからそういうところで対決しなが  
 ら、ベルクにも影響を与えていると思いま  
 す。僕の「場」の考えはね、随分彼と議論  
 したから。

服部…おそらく先生の言われる「場」は絶  
 対にベルクに影響していますよ。

伊東…でもね、ベルクはとにかく本当に大  
 事にすべき人です。ああいう人がでたから  
 凄い。彼がいると達意のフランス語あるい

は英語でもって日本の思想を解釈し出す  
 が、これは大変な仕事だ。彼はフランス語  
 でもただのフランス語ではないからね。語  
 源を研究して創っていくわけだから。

服部…ちよつと造語が多すぎるかなと思っ  
 ているんですが。

伊東…思うけども、あれをやるのは彼だ  
 から。深く理解して、今までのヨーロッパ  
 語じゃ駄目だつて知っているんですよ、彼  
 は。

服部…ベルクの強みはフランス語だけじゃ  
 ない。英語、ドイツ語、それからラテン  
 語、ギリシャ語、中国語。本当にすごい、  
 もう十か国語ぐらいやっている。だからベ  
 ルクさんを仲介者として呼びたいですね。

伊東…僕の結論はこう言ってもいい。英語  
 で書くことを急ぐことはない。もつと日本  
 語でしっかり考えて、徹底した日本語で書  
 きなさい。そうしたら誰かいい人が翻訳し  
 て、それをいい英語やフランス語にしてく  
 れるだろう。こっちの方が重要だ。薄っぺ  
 らな英語で熟さないものなんて書いたから  
 って決していることじゃないということ。  
 だから知られる時間が遅れてもいいです

よ。本当に残るものは何かを考えてやる  
 ということが大切だと思う。ここに移って、  
 時間が与えられて、これで一つの目的は達  
 したかなど。もう一つは比文研での「宇  
 宙と人間の起源——我々の由来」という連  
 続講義。この「我々の由来」ってところが  
 実は大切で、我々のもっとしての人類史あ  
 るいは宇宙史を考えるっていうことをここ  
 でやったよね。宇宙と人類、これも大変で  
 すよ。だから原稿をあげてくれているけど  
 まだ赤が入ってない。僕の寿命を尽くすま  
 でにやればいい。これはもう僕の生命の  
 限界と競争だけど、やれるものをやって終  
 わりたいと思っているところです。

#### 廣池千九郎の意図を汲む

服部…それで、もう一つ、こういうことを  
 将来の若者は気をつけてほしいと思うこと  
 があるんです。廣池千九郎という人は一つ  
 の真理に辿り着いたと自分で確信しまし  
 た。その時、そこに二つの選択肢があっ  
 た。宗教的に持っていくか、あるいはもう  
 一つは学問でいくか。廣池千九郎先生は学

問にすることを選んだ。これは、一種の悟りのような体験があったのを、今度は学問的に解明して広めていこうとされたということがあるんです。では、学問として立てたということはどういう意味合いを担うかという、学問とは、啓示宗教と違って進歩しなきゃいけない。だから、廣池千九郎がその学問を立てた時から実際に進歩していかなくちゃいけない。そういう運命が与えられたんですよ、それを継承する者に。『道徳科学の論文』の最初に書いてある言葉が文字通りに受け取るべきなんだ。『新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試み』としての道徳科学の論文』なんです。最初の試み。それは大きな意味を持つていて私は思う。だからああいうものを大著ですけども書かれた。それを今度はみんなにモラロジーを学問として発展させてくださいと言っているんです。ですから、『道徳科学の論文』が終着点ではなしに出発点なんです。学問だから時代とともに動かなければならない。廣池千九郎研究というのは人物研究です。それはこの研究センターの中核になければいけません。だ

けど皆がそれをやっていたら人物研究で終わる。そうでなしに廣池先生の意図を汲んだら、全体のモラロジーというのを進歩させていかなければならない。それは皆の使命だと思います。また学問というものは現代人に訴えるものでなければいけない。現代人に訴えるには現代語で語らなければいけない。それと共に世界中で新しく起きている新しい知見というものを絶えず入れているかなければならない。そのところがなされないと、学問にならないと思う。一つの人物研究ということで終わると思うので、そこを皆さん、どういう方面でもいいですよ。比較文明でもいいし、あるいは大脳生理学でもいいし、いろんなものを国際レベルに高めていく。それがこの研究センターに与えられた使命ではないかと私は思っています。

伊東…僕も賛成だね。ここの所員の先生たち、みんな個性豊かになってもらいたい。個性豊かにね。みんな自分の興味に従って、色んな事に興味を持ってますよね。もちろん廣池さんの人物の研究もありますけど、自分の個性っていうものをそこで生か

す。だから一番重要なのは、どこを切っても同じ金太郎館になっちゃったらこれが一番いけない。大切なのはそれぞれが個性豊かで自由であること。それで若い人たちがよい研究を出している。とってもいい雰囲気。それをもっともつと強めていく。服部先生が言ったように、国際的な次元で高めていく。そういう存在に道徳科学研究センターがなってもらいたい。金太郎館になっちゃうとどんどん小さくなりますよ。誰もが同じこと言ってるようになってっちゃう。

それぞれ専門を持ってそれを生かしてゆく。中国哲学の専門の人、インド哲学が専門の人、社会科学の専門の人とかね。

服部…ひとつ私が考えるのは、廣池千九郎がもし世界旅行をしていたらどうだったか。これは廣池千九郎先生の念願だったわけです。これは実現していません。中国へ行っただけだ。世界を見ていたらどうかってことを考えてみる。これは必要だと思うのです。廣池千九郎が世界旅行をしていたらどうなっていたか。言うことが絶対違ってくる。それは確信します。廣池千九郎への思慕の念、これは当然あるべきです。た



だ、もし行っていたらどうだったのか、ちよつとそこを補足して欲しいんですね。例えば『道徳科学の論文』の中でもヨーロッパのソクラテスとキリストの部分は正直言つて弱い。この部分は弱いんです。当然ですよ。あれだけの苦学でやって『史学普及雑誌』とか色んなものを共同でやりながら、ついに東洋法制史というものに行く。偉い先生にも会ったけど全部東洋学者。そこで四大聖人のキリストとソクラテスを同等に扱いますか。扱いませんよ。だからご本人が、私には疎いので、これこれの先生のを借用します、と書いてるじゃないですか。じゃ、皆さんはそれでいいの、という問題。だからそこをこのろをもつともっと独自の、伊東先生が言ったように、それぞれの個性を持った専門家がでてきたほうがいい。宮下君（宮下和太）は例えば中国の朱子学、陽明学とやっていくのは非常に結構。でも他の人でやっぱり主要文明の専門家がでてほしいんですよ。それが廣池先生の意図にも適うことなんです。だからそういうところを補つていって本當の学問的なセンターとして世界

的にも発表できるものになっていけばいいなと思うんですね。

#### 日本の世界への貢献

伊東…僕は道徳科学センターに移つてきて感謝しなきゃいけないのは、やっぱり立木先生と犬飼先生だね。このお二人はずつと僕の講義のときに助けてくださった。そしてたくさんの方が出てくれたよね。アブ君（アブドウラシイティ・アブドウラティフ）も講義の広告をいつも作つて本當に助けてくれたんだよね。だから本當に立木先生と犬飼先生にはお世話になった。これはここにお礼を申し上げておかなきゃいけない。楠事務長（楠伸次）をはじめとして、歴代事務長のお心遣いにも深く感謝したい。それから僕は服部先生といつも一緒だったということを幸福に思いますよ。服部…ありがとうございます。僕の方が幸福に思っています。伊東…やっぱり、これだけ国際的視野の広い人で、いつも正論を言っていますよ。このことを評価しなければいけない。正論を

言っているんですよ、この人は。言いたくない正論まで言っていますよ。そこがいいところなんですね。だからそうなるってことは、人柄だね、結局は。おもねったり、妥協したりつてことがない。この人とずつと付き合ってきたことはとても愉快。それから所さん（所功）。いい人が入つてくれた。今後発展していつてもらいたい。

服部…私を麗澤大学に呼び返してくれたのは廣池理事長だけど、そこで伊東先生にお会いできたというのは私の本當の僥倖で、こんな幸運なことはなかったと私は思います。世界を回っていて、今までの世界史には歪みがあると、ちょうど欠けているのは中央アジアだと気づいた。しかも中央アジアで何が書かれていないかというところ、イスラム圏だということに気がついた。僕はその頃パリにいて、伊東先生は日本にいました。『十二世紀ルネサンス』という本を伊東先生が書いておられる。ちょうど伊東先生がイスラム世界の重要さということを書かれていた。僕も独自にそれを感じてきた。それが出会うということであつて、それから伊東先生の汲みつくせぬ知識、学問

に触れて十数年、もうちょっと長いかな。日々、お会いするたびに私にとつては学びの時間があったということ、改めて感謝申し上げます。

南方熊楠に萃点という言葉があつて、南方曼荼羅というのを見ていますと、因果律ではだめだということを書いてあるんですね。因果律じゃなしに縁だと。因じゃなしに縁だと熊楠が言うんですね。縁とは何かというと、因果律という線が複雑に絡み合っているということなんです。ところがそれがどこかに集まってくるという集合点が生まれる。それを萃点と南方熊楠は呼んでいますけど、この研究所で伊東先生と出会ったということに、私はそれを感じるんですね。ここが萃点で、だから出会えたということに感謝ですね。運命に感謝しています。伊東先生のような該博な知識は私にはありませんけども、思ったことを明白に言うということ、誰にもおもねらないで言うということが学問の一つの姿勢ですから、それを貫けたというのも伊東先生という方が隣にいてくれたということがあると思います。

伊東…そういうわけで、後半の十二年間、僕の子想していなかった充実した時間だったね。こっちに移ってきてから一番最初によくやってくれたのが宮下さん。あなたは僕を助けてくれた。あなたは忘れちゃっていてもかもしれないけど、僕が移ってきた時ちょうど僕の前のデスクにいたんだよ。だからあなたが全部やってくれて、それから大学の方に移っちゃったけどそれまでは本当によくやってくれた。今はそれをやってくれるのは竹中さんなんだ。彼が本当によくやってくれて、いいドクター論文を書いた。これは僕の嬉しいことの一つだね。やっぱり後継者ができるってのはいいじゃない。いい後継者が。

服部…彼は「The transgenerational」という言葉を出した。論文で一つの言葉が残るのがやっぱりいいね。いろんないい論文もあるだろうと思うけど、一つの言葉が残るのは非常にいいこと。フランス・ペーコンは「知は力なり」と、これ一つでペーコンってわかるじゃないの。こういうのが残るっていいのがいんですよ。これはちょっといいことやったな(笑)。

伊東…彼の論文はとてもいいよ。やがて活字になるだろうけど。だからそういう人が出てるってことだよ。他にもまだいますよ。道徳教育の歴史を書いた江島さん(江島頭一)とか。あるいは橋本さん(橋本富太郎)の廣池千九郎の評伝。あれもいい本だ。日本評伝選、あれに入ってたんだからすごい力作だね。だからそういうのがどんどん出ているじゃない、若い人に。これはとってもいいことだよ。宮下さんも出してる。とってもいい本出してるよ、力作だ。

服部…全部いいんだけど、各自どこかの国際学会で発表してほしいというのはありますよ。廣池先生が着目されたもの、これは別の言葉でいうと、現在の世界に日本から発信すべきメッセージがあるか、という問いなんです。日本から現世界に発信すべきことは、私自身他のところでも話していますけど、それはある。ヨーロッパの近代文明を造ってきた直線的な成長理論じゃないに、自然を搾取する文明じゃなしに、それは限界が来ているから、「循環と再生の思想」ということを私は申し上げた。それからもう一つ、人間の間でしかなかった倫

理というものを地球を含めて考える、地球の一部である人間として考えましょうということ、「地球倫理」という言葉を前に出した。そういうことを考えて欲しいんですね。それは現代の日本の学会の人もみんな受け取っている言葉になっていますよ。「地球倫理」ということで、そんな変な言葉はないなんて言う人いませんよね。そういう風にすでに変わってきているんですよ。これは実は廣池先生の考えとも矛盾していない、近いと思っっているんですよ。自然そのものに合体する「自然の法則」、これなんです。だから新しい言葉で提唱すると日本の学会もそのまま受け取ってくれます。「通底」という言葉を私は言いましたけども、随分多くの方が使うようになってきました。伊東先生の方がもっとも多いですよ。伊東先生の提唱された言葉が日本の学会で用いられているものが非常に多い。世界の学会にも受け取られています。ということ、皆さんがたも廣池先生の意を汲んで、現代人に通じる言葉で極めて本格的なものを発信する。僕は大胆にもその象徴として伊勢神宮を出したけれど、これ

はどこに行っても出してもいいものなんだと僕は思う。というのは、それが世界に対しての、現在「プラネタリー・バウンダリー」という地球の限界ということを行っている人々に対しての日本から発信できるメッセージです。現在トランプ大統領がTPPからの脱退、パリ協定からの脱退、イラン核合意からの脱退と全部脱退する。こういう人が世界のトップでいるっていうときに世界は危機に瀕しているというのは確かなんです。その時に発信すべきものは、人間と地球を同時に救う倫理だと思いませんか。それをここから色んな言葉で発信してほしいと思います。

伊東..そう。だからあえて言えば、僕が向かっているところは世界なんです。日本だけでは足りない。日本だけを考えている思想なんかはまだ小さい。これからは世界です。日本を含めた世界です。日本の世界への貢献、これを考える。それができる歴史と実力と勢いをいま持っている僕は思う。僕はそれを引き出したいよ。それには自分が先頭を切らなくてはいけないなと思っっている。僕の事はそういう方向に向か

っているんです。決して日本人だけを対象にしない。日本人をおだてる思想、これは危険だからね、あまりやっちゃいけないよ。この頃一部では流行っているようだけれど。あんなものをやっていたら思想は墮落するよ。モテるだろうけどだめ。浅いよ。もっと広い知識、世界のことを考えなさい。やがては世界のためになるという確信が自己の中にある研究——これが我々の目指すところ。そしてセンターの目指すところでもあつて欲しい。これが僕の最後の言葉です。

(編集者注..本稿は、平成三十年十月十七日にモラロジー研究所道徳科学研究センター内で公開で行なわれた本誌収録のための対談を編集したものである。)

